

氏名・（本籍地）	北 本 佳 子（東京都）
学 位 の 種 類	博士（人間学）
学 位 記 の 番 号	甲第 50 号
学位授与の日付	平成 20 年 3 月 15 日
学 位 論 文 題 目	ソーシャルワークのコミュニケーションに関する研究 ー生活施設におけるソーシャルワークに焦点をあててー
論 文 審 査 委 員	主査 石 川 到 覚 副査 綾 部 裕 子 副査 橋 本 泰 子

北 本 佳 子 氏 学位請求論文審査報告書

「ソーシャルワークのコミュニケーションに関する研究 ー生活施設におけるソーシャルワークに焦点をあててー」

論文の内容の要旨

本論文は5つの章立てで構成される。まず研究課題の背景や所在を定め、先行研究では日・英・米でのソーシャルワークの研究および教育に関する研究に当たり、特に英・米におけるソーシャルワーク研究史の中でも1960年代以降から「面接」に関する研究が進められてきた経緯を整理し、近年になってソーシャルワークにおけるコミュニケーション研究が漸く本格化してきた段階にあることを明らかにしている。また、日本では、ソーシャルワーク面接場面における技法研究が中心で、その内容もコミュニケーション研究というよりも、アメリカで発展してきたカウンセリング理論の援用が中心であり、その教育においても同様の傾向にあることを検証し、社会福祉機関の相談場面のコミュニケーション研究はあっても、生活施設のコミュニケーション研究が僅かしかないとを確認している。続いて、言語学・コミュニケーション論に関する先行研究における定義やこれまでの研究動向も検討している。

本論文の中心には、これまでのソーシャルワーク研究では着手されなかった生活施設（特別養護老人ホーム）におけるコミュニケーションそのものを研究対象にし、5カ年間にわたる5つの調査研究で得られた成果を論述している。本論文で採用している理論モデルには、「ヘルス・コミュニケーション・モデル（人間関係、交流、環境の3要素が循環するモデル）」と「収束モデル（循環的なプロセスを経て収束するモデル）」の援用の有効性ととともに、新たなコミュニケーション・モデルが生成できる可能性を踏まえたモデルとして採用している。5つの調査枠組みは、生活施設の「面接場面」、「生活場面」、「援助の展開過程」におけるコミュニケーション分析であり、それらコミュニケーション・データを言語学における語用論を用いた分析によって考察を加えている。

そのコミュニケーション分析と考察の内容は、面接場面では援助の開始から終結までの展開の仕方によってコミュニケーションの流れ（循環）に影響があること。生活場面では、援助者と利用者だけでなく、

職員同士や家族その他、利用者をとりまく関係者とのコミュニケーションの循環が見られ、何気ない日常会話であっても、開始→情報収集→支援・援助→終結、という流れ（循環）で進むこと。援助の展開過程では、生活支援・課題解決を志向したコミュニケーションの展開（循環）が見出されたこと。そうしたコミュニケーション分析からは、それぞれの場面における効果的なコミュニケーション・ストラテジーの活用とともに、生活場面における多職種の援助者をはじめとして、関係者間での多様なコミュニケーションが循環することによって、ソーシャルワークの展開が有効に機能していることを考察している。そして、生活施設におけるコミュニケーション交流によって循環が促進され、利用者の理解が深められるという研究結果を導き出している。

本論文の結論では、生活施設における利用者中心のアプローチとなるべきソーシャルワークは、多様な生活支援場面のコミュニケーションが組み合わせられ、それらのコミュニケーションが循環するという支援過程によって成立するものであり、生活施設におけるソーシャルワークは、本論文で新たに示した「ソーシャルワーク・コミュニケーション・モデル」が活用できるという結論を得たとしている。

審査結果の要旨

予備審査および本審査の概評では、本論文が生活施設におけるソーシャルワークを成立させるための「ソーシャルワーク・コミュニケーション・モデル」を提示した点に高い評価が与えられた。その研究内容の評価では、我が国の生活施設の典型である特別養護老人ホームにおける日常的な生活支援の様々な場面で利用者と支援者および多様な人々等の間で交わされるコミュニケーションそのものを研究対象にして、これまでのソーシャルワーク研究では視点が当てられてこなかった状況において、言語学ないし語用論で活用されるコミュニケーション分析という研究方法を用いて、新たなソーシャルワーク研究の領域を切り拓く、優れて実証的な研究であるとした。

本論文の特徴は、研究テーマを設定した研究の課題となっている所在を明らかにした上で、イギリスやアメリカおよび我が国のソーシャルワーク研究における先行研究を丹念に当たり、本研究が現時点において欧米でも、ソーシャルワークにおけるコミュニケーション研究としてようやく途に就いた段階であることを検証している点である。また、これまでのソーシャルワーク研究は、社会福祉機関を中心にした「面接場面研究」が主流であって、本研究のような生活施設の「生活場面研究」に焦点を当てたソーシャルワーク・コミュニケーション研究は見当たらないことを文献研究によって示している。そうした研究動向を踏まえ、我が国の生活施設の中でも第三者評価を受けた特別養護老人ホームにおける「面接場面」、「生活場面」、「援助の展開過程」等のコミュニケーション場面における情報交換や意思疎通などの相互作用過程について、ヘルス・コミュニケーション・モデルの枠組みを援用しながら、コミュニケーション分析という質的研究法を用いて、精緻な分析と考察によって論証している点である。

本論文の結論からは、生活施設のソーシャルワークが多様な生活支援場面のコミュニケーションで組み合わせられ、それらのコミュニケーションが循環するという支援過程によって成立するものであり、生活施設でのソーシャルワーク・コミュニケーションには、利用者と支援者と関係者の適切なコミュニケーション交流の循環が図られることによって促進されるとし、本研究で新たに提示した「ソーシャルワーク・コミュニケーション・モデル」が活用できるという結論を導き出した。こうした研究結果は優れて独自性を有した知見であるといえよう。

本研究で最も評価する点は、これまでのソーシャルワーク研究では、ほとんど取り上げられてこなかつ

た生活施設場面を研究対象にして、そこでのコミュニケーションそのものを分析して、生活施設における「ソーシャルワーク・コミュニケーション・モデル」を提示したことにある。また、本研究成果が社会的に貢献する可能性は、社会福祉サービス利用者の在宅生活の場においても援用できる可能性をも有している。さらには、我が国の施設ソーシャルワーカー養成のための社会福祉教育においても有用なモデルの提示になるものとする。

しかしながら本研究は、限られた施設における調査研究による分析と考察であることから、提示されたモデルの普遍性を再検証する研究へとさらに深めるよう期待するとともに、施設ソーシャルワーカー養成や教育・研修等に活用できる研究への展開も今後の課題となろう。

以上、当該論文の審査にあたっては、主査の石川到覚（大正大学教授）と副査の橋本泰子（大正大学教授）および綾部裕子（城西国際大学教授）の3名での口頭試問による予備審査を経た後に、公開審査による本審査を実施した結果、優れた課程博士論文であるとの評価が一致したので「合格」という判定となった。